

異文化感受性発達モデルにおける「統合」の考察

山本志都¹

1. はじめに

異文化感受性発達モデル（DMIS：Developmental Model of Intercultural Sensitivity, 以下、DMIS と記す）は、個人の差異を知覚する構造が、単純な状態からより複雑に発達していく過程を示している。個人の差異をめぐる主観的経験は発達に応じて変化していく（Figure 1）。Milton Bennett がこのモデルを発表したのは1986年で、当初の目的は、異文化トレーニングを行う者が、学習者の文化的差異に対する主観的な反応を理解して、次の発達局面への移行を促進するためのトレーニング目標を明確に把握できるようにすることであった。

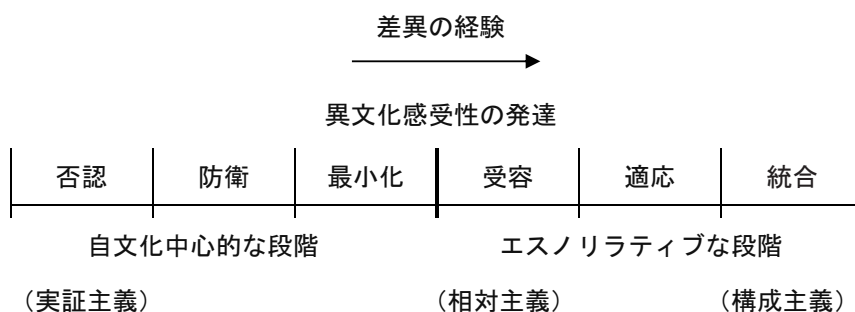


Figure 1. 異文化感受性発達モデル
(Bennett, 1986, p.182より, 著者訳。ただし括弧内は著者による加筆)

DMIS には「否認—防衛—最小化—受容—適応—統合」の6つの発達の局面がある²。本研究では、これまであまり議論されることのなかった最終段階の「統合」の考察を試みたい。特に構成主義を DMIS のメタ理論とした場合の「統合」には何が見えてくるかについて取り上げたい。DMIS は一貫して構成主義の考え方に基づいた理論であり続けた。異文化感受性の初出論文（Bennett, 1986）では構成主義という用語は使われておらず、代わりに現象学によるアプローチという説明になっているが、Bennett がポートランド州立大学の教員であったときに大学院プログラムで指導を受けた Yamamoto (1996) は、このモデルの基盤が現象学、構成主義、認知的複雑性にあることへの理解が重要であると述べている³。後の Bennett 論文（Bennett, 2012; 2017）では科学的パラダイムの議論と構成主義から記述した DMIS の説明が増え、それ

につれ「統合」の解釈も変化しているので、その変化についても触れることにする。また「統合」における境界的なアイデンティティを描写するリミナリティ（liminality, 境界性）の概念についても検討して、異文化感受性の発達における「統合」をよりくわしく考察したい。

2. 異文化感受性発達モデル（DMIS）の概略

ここでは DMIS についての概略を述べる。発達モデルでは次の局面へと発達していくために何かを内面化していくのであるが、DMIS の場合はそれを差異（difference）であるとしている（Bennett, 1986）。差異の知覚は、個人が対象を知覚する際に注目した部分が何であるかを契機に境界形成（Spencer-Brown, 1969; Glasersfeld, 1995）することによって生じる。これまで異文化コミュニケーションの教育が必要とされてきたのは、主に外国人や異なる人種、民族、宗教間での差異が問題となる文脈においてであった。それゆえに DMIS における差異にも、集団的事象である文化的差異（cultural difference）の側面に焦点が当てられている。

社会的カテゴリー間に認識される文化的差異とは、境界形成して現実知覚する際に浮上する、差異のひとつの形態であるといえる。山本（2022a）はこれに加えて、そのときどきの話題や目的などコンテキスト次第で人々の立ち位置が非対称になるときの差異や、脳の先天的な発達あるいは後天的な損傷が多様な情報処理と知覚をもたらすことによって生じる差異なども、異なりとして認識される対象に含めている。文化的差異に注目するだけではとらえきれなかった異なりである。これらの異なりは、「異文化」から「文化」を外した「異」（differentness）として概念化されている。「異」を経験することもまた、DMIS によって描写できる範疇に入る。

次に DMIS の 6 つの発達の局面について説明する。ここでは差異を知覚する構造の発達過程として DMIS を説明した山本（2022a）の描写を中心としながらまとめる。まず「否認」では、ある対象が周囲の環境の中に埋もれたまま未分化で、差異を知覚する以前に、「見ても見えない」（p. 275）状態になっている。たとえば、日本で働く「外国人労働者」という言葉を聞いたことがあったとしても、対象となる人々への想像力が及ばない間は、人は相手と自分の生活とのつながりを見出すことができず、相手をリアルな存在として認識することもできない。存在感を意識することのない相手には不安や脅威を感じることもない。関心もなければ批判や差別の気持ちもない状態といえる。対象に注意が向きその存在が「見える」ようになって初めて、それに対する反応が起きてくる。そのことを山本は「出会いによる可視化」（p. 276）と表現している。ただし出会った相手に対し、自分で対処する必要性のない場合、見なかったことにして「否認」の状態を維持することもある。しかし、対象と交流する場面に想像が及ぶようになると、どう接すればよいかわからないことに漠然とした不安を覚えることがある。

実際に接触する機会やメディアで見聞きする機会が増えたとき、差異が気になるようになると、相手に対する違和感や抵抗感が出てきて、次の「防衛」の反応が起こる。「防衛」とは、全体を自己カテゴリーと他者カテゴリーに二項化した境界形成により、相手との関係を単純な対立構造によってとらえている状態を指す。自己カテゴリーに通用する 1 つのシステムや判断

基準しか利用できず、相手にもそれを適用することから、自分の想定が通用しない場合に、差異を差異としてではなく、誤りとして、判断しがちになる。差異は、それまでなじんできた環境（たとえば自分の身の回りで見聞きしてきた世界や街並みなど）を乱す存在として知覚される。違和感がもたらされることや調子を狂わされることに否定的な感情が生じると、自分の世界を守ろうとする防御反応が出てくる。自己防衛や自己正当化は、「防衛」のサブカテゴリーでもある「優越感」や「誹謗中傷」(Bennett, 1986)につながる。相手から距離を置くことによって「否認」の状態に戻そうとすることや、攻撃をして対象を排除しようとするにもつながりうる。

しかし二項化していた境界の「曖昧化」(山本, 2014; 2016)や再カテゴリー化によって、目立って見えていた差異を打ち消し、自分と相手とを同一カテゴリー内に入れなおす境界変更が起こると、違いを「最小化」した局面へと移行する。たとえば、違和感や拒否感を覚えていた相手と直接交流したときに、話してみれば自分と同じ普通の人だったと思うことがある。相手の立場や境遇の中に自分との共通点が見つかることもある。曖昧化とは、そのようにして自分と相手を分け隔てていた境界の線引きを曖昧にしていくことを指す。そうやって、「違いはない」や「同じ〇〇である（〇〇にはカテゴリー名が入る）」と差異を知覚しなくなる。

「最小化」の状態は対立的な関係を避けようとする、または分断して対立する状態に疲れて調和を求めようとする動機付けから起こる場合もある。アメリカのZ世代に人種で人を分けない志向の強いこと (Zeiser, 2014) も「最小化」の現象として説明することができる。

「最小化」では差異を一種のバリエーションとして自分にわかるものに置き換え、自分に理解できる範囲で許容する。その姿勢は、異質な存在や住む世界の異なる存在として遠ざけていた対象を、身近な、あるいは、自分に通ずるところのある存在としてとらえなおすことに役立つ。だがその他者理解や異文化理解はあくまでも自分の感覚を中心とした自文化中心的なものになる。

「最小化」から「受容」へ移行する上では、一元化していたカテゴリーの再分離が必要になる。相対主義へのパラダイムシフトともいえるこの転換点を、山本 (2022a) は、「目からウロコ」や「そういうことだったのか」、「腑に落ちた」という言葉で表現される「異対面」の経験として概念化している。ある特定の立場や特定のコミュニティには、そのコンテクストに特有のシステムや判断基準、独自の感覚があるということに気がつくと、人々はその対象を自分と同一視することをやめ、独自に成立する存在として、とらえなおすことができるようになる。自分中心の軸に加え、もうひとつの軸を立てて、他者理解や異文化理解を試みることができるようになると、差異を尊重した文化相対主義の「受容」へと移行すると説明することができる。

この「受容」は相対主義であり、構成主義的な観点からの「受容」とは異なっている。その違いを端的に表すのは、カテゴリーを物象化 (Berger & Luckmann, 1966) して、「所与」(given) のものと見なしている点であるといえる (山本, 2022a)。他者カテゴリー（たとえば他国や他の世代・役職・趣味活動など）のことを、昔からそのような存在として確立したものであると見なした上で、その独自性を、「そういう人もいる。そのことを尊重する」と本質的

な違いとして尊重している。「中国には中国のよさがある」として、よりくわしく知ろうとすることや、「一口に外国人労働者と言っても、インド人やベトナム人などがいて、それぞれがまた違う」として、より具体的な区別に注意を向けることができるようになり、差異に関する知識を獲得していく。しかし「A文化の価値観はこうだ」や「Bという立場ではこうする」などといったことがどれほど詳細までわかるようになったとしても、それらをカテゴリーの本質を表すものと固定化して見ている限り、差異を本質的なものとして知覚している。

「受容」から「適応」への移行は、知覚構造の変化というよりも、構造の複雑化と精緻化、身体化に関わるといえる。「適応」では他者のシステムで動く感覚を内面化する。つまり、異なるコミュニティや異なる立場での実践に参加することを通して、身体で感覚をつかみ、その現実の組織化を自分でも行えるようになる。異なる価値観や行動になじみができると、異なる感覚が自分のものとしてわかるようになったり、ぎこちなさが取れて自然に行動できるようになったりする。異なる行動や価値観一式を自分の選択肢に加えることができるようになる。ただしカテゴリーを「つくった」意識を持たずに適応している場合、「日本／アメリカ」や「学生／社会人」などとして分けた境界形成やくくりを「そのようなものとして実在する」と物象化したままで、各カテゴリーに独自に存在するシステムに対して適応していくことになる。

この段階で Bennett (2017) は、エンパシー (empathy)⁴ により他者カテゴリーでの経験に想像的に参加することを重視している。「適応」でのエンパシーの行使は、当初は単に既存の境界を越えたカテゴリー間の移動を可能にしている。そこから境界形成を流動化させること、さらには境界形成する行為自体を意識化することへと発展すると、構成主義的な「統合」へと移行すると考えることができる。Bennett, M. (1993) は、現代の社会、政治、経済、教育などの複合的な相互作用を踏まえて、固有の文化を大きく超えた志向性と世界観を持つ新しいタイプの人々の増加と「統合」とを関連づけている。

以上において、「統合」の手前までの発達を概観してきた。「適応」から「統合」への移行、および「統合」の詳細な検討については後ほど紹介する。以下では、DMIS が研究上で使用されている文脈において「統合」がどのような位置づけにあるかを紹介したい。

3. DMIS の「統合」の先行研究における位置づけ

「統合」は、文化間移動を多く経験してきた人のアイデンティティを説明することから、より複雑で豊富な異文化体験を経て到達すると考えられている。「統合」に至るには長い時間を要することから、通常は教育目標として掲げられてはいない。異文化間能力の発揮という意味では「適応」の状態でもよいとされている。Bennett 自身も2014年の論文で次のように述べている。

異文化間能力を必要とする状況において、必ずしも「統合」が「適応」より優れているわけではない。「統合」は、非支配的地位にある文化のメンバーの多くや、長期海外駐在者、そして「グローバルノマド」などを含む、ますます多くの人々について説明するものである (Bennett, 2004, p. 72, 著者訳)。

DMISを理論的基盤に開発された Intercultural Development Inventory（以下、IDIと記す、Hammer, Bennett, & Wiseman, 2003）は、異文化間能力の測定尺度として数多くの研究や教育で活用されている。IDIにおいて「統合」は、測定の対象から外されている。IDIの測定する異文化間能力は、DMISの「統合」で描写されるアイデンティティ構築とは理論的に無関係である（Hammer, 2012）という見解も出されている。

一方、日本的な観点からの異文化感受性発達尺度を開発した山本（2022b）は、下位尺度の1つである「相互適応」を、DMISの「適応」の後期から「統合」の構成主義的な知覚構造の一部までを反映した構成概念であると位置づけている。「相互適応」には、双方の間に通用する第三文化のような領域の創出に自分自身が関与することへの意識や、「海外に住んだり、外国人と深く関わったりした経験ならではの感覚が自分の中であって、それはそのような経験のない人とは分かち合いにくいものだ」と周辺化することへの意識もある。これらはカテゴリーを所与のものとして自己から切り離し、客体視する知覚ではなく、影響を与え合い受け取り合う関係としての他者性を現実には織り込んだ知覚として説明されている。このような知覚は境界形成の流動化へつながるものとして理解されている。

異文化感受性発達尺度においても、「統合」が単独で測定されるわけではない。しかし相対主義的になった知覚構造の次の発達として、「相互適応」には、相対化し続ける姿勢の常態化や、自己の主体的関わりの意識化を含んだ構成主義的な経験の描写が、取り入れられている。これらはアイデンティティ構築に関与すると同時に、異文化間能力としても扱えるものであるといえる。

次に、アイデンティティ構築としての「統合」について、ヒューマンライブラリーの活動を行う当事者のアイデンティティを分析した山下（2018）の研究を取り上げたい。ヒューマンライブラリー（別名：生きている図書館）は、生きにくさの自己開示を含んだ人生話を行う話し手を「本」と表現して、「読者」としての聞き手に貸し出す催しであると説明されている（東京ヒューマンライブラリー協会, <https://www.tokyo-humanlibrary.com/about>）。「本」となる語り手1人に対し「読者」となる聞き手は1～5人と少人数であることや、対話の時間は30分程度であることなどが決められている。多種多様な語り手から話を聞くことにより異文化を学ぶことができ、その効果には、他者との相互理解および偏見の軽減のあることが報告されている（山下, 2018）。

山下は、DMISの「統合」を、多重の文化的アイデンティティが構築され統合されている状態、そして周縁的な状態として位置づけた上で、「本」としての語り手の一人である小林春彦氏の語った内容について考察している。山下によると、18歳の時に脳梗塞で倒れた小林氏は、その後、高次脳機能障害と診断されさまざまな困難を乗り越えてきた。自身を「外見からは判断できない健常者の姿をした障がい者」と表現する小林氏が語った内容を、山下は以下のように記録している。

視覚障害で視野が極端に狭いため、普段外出する際は白杖を使う。しかしスマートフォンは手元に近づけることで見るができるため、電車の車内ではスマートフォン

を使う。すると周囲からは「目が見えるのに白杖を持ち障がい者の振りをしている」と勘違いされ、不当な扱いを受けることが多々あると言う。障がい者仲間にもこのような苦しみを理解してもらうことができないと語る（山下, 2018, p. 80）。

山下は、健常者と障がい者の文化間の境界上にいて、自身をどちらの文化にも属せない文化の周縁にいとす小林氏のことを、多重のアイデンティティを持つ人物として考えている。そして小林氏が見えない悩みを抱える健常者の支援活動を行っているのは、健常者と障がい者の文化の垣根を越えた活動でもあるとして考えている。そこには、周辺性の中から多重の文化的アイデンティティを統合する「統合」のひとつの人間像が見出されていることがうかがえる。

以上を次のように整理する。まず DMIS の「統合」には、山本（2022b）のように「適応」からの連続性を認める立場と、Hammer（2012）のように「適応」までの発達から切り離す立場とがある。そして「統合」は、アイデンティティ構築として理解されることが多いものの、山下のように「統合」を具体的な人物像と関連づけている研究は少なく、具体的な人物像がわかりづらい状況となっている。したがって、境界間を移動する人の経験や、多重のアイデンティティ構築による自己の統合を説明する上で「統合」の概念を役立てられるようにするには、さらなる検討が必要といえる。

4. Bennett による「統合」の描写

DMIS の「統合」が初出する論文（Bennett, 1986）では、Adler（1977）による多文化人（multicultural person）の定義が参照されている。Bennett は、Adler が多文化人について説明した箇所を引用し、この考えが多元主義を超えるものであると評価している。Adler のいう多文化人とは、単に異なる文化に敏感な人なのではなく、常に、ある文化的なコンテキストの一部になりつつあると同時に、またそこから離脱していく過程の中にある人である。

このことから、Bennett の考える差異の「統合」とは、差異をプロセスとして解釈し、そのような差異に適応することができると同時に、さらには自身について多様な文化的方法で解釈できることを意味していたことがわかる。最初期に Adler を引用した Bennett の統合観には、コンテキストに適応して自分自身を一体化させていく境界形成、その状態を解除して、ひとつのコンテキストから移動するという流動性、そしてこれらを常に起こりつつあるプロセスとしてとらえる感覚のあることがうかがえる。

「統合」には、アイデンティティのあらゆるレベルでの選択を伴った動的なプロセスとしての自己の感覚があるとされている。しかしそのようにしながら自己概念を健全に保つことには、困難の生じる可能性があることも指摘されている。Bennett は周辺化する経験を 2 極化した例で示している。ある一方の極端な例としては、自らが作り上げたアイデンティティに十分に満足し、さまざまな状況にうまく適応しているように見える人々がいる。もう一方の極端な例としては、文化的アイデンティティの欠如に心を痛め、疎外感と混沌にさいなまれたよう

な人々がいると述べている。

後にこれら2つのタイプの周辺化には、Janet Bennett (1993) の論文で名づけられた概念が適用されている。前者は「建設的な周辺性」(constructive marginality)、後者は「閉じ込められた周辺性」(encapsulated marginality) である。しかし後に Bennett (2012) は、「閉じ込められた周辺性」を「統合」から除外したことについて言及している。「閉じ込められた周辺性」とは客観的な自己を記述するものであり、構成主義的な概念ではないというのがその理由であった。

それでは次に、より最近において、Bennett が DMIS を構成主義と明示的に結び付けて説明した2017年の論文で、「統合」の説明がどのようになされているかを見てみたい。まず、以前用いられていた周辺性 (marginality) という言葉が用いられなくなっており、その現象は発達のリミナリティと言い換えられて、とらえなおされている。リミナリティとして説明されているのは自己の経験の拡張であり、異なる文化的世界観を流動的に出入りすることが含まれる。このようなリミナリティは、文化の架け橋として機能するものでもあり、高度な異文化間調整を行うために利用できるものでもあると Bennett (2017) は述べている。

「統合」でのコミュニケーションは、コンテキストの内部にとどまるのではなく、コンテキスト間で行われるものとしてとらえられており、そのようなコミュニケーションを通して意味と行動のメタ・コーディネーションが可能になるとされている。組織レベルでいうと、「統合」の段階にある組織では、多文化的なワークグループが相互適応しながら第三文化的なポジションを構築するとされている。そのような組織では、第三文化的な解決方法が付加価値を生み出すことが期待されている。

リミナリティに関する上記以外の詳細は書かれていないが、中心から離れることを意味する周辺性と比較すると、リミナリティとして現象を観察することは、境界形成するプロセスの移り変わりという、より動態的な側面の焦点化を可能にするといえる。また、互いの「間」(in between) での意味や行動をメタレベルで調整しながら相互に影響を及ぼし合う相互適応、および、第三文化の生成という創発的な側面も強調されるようになっていくことができる。

5. 「統合」の考察

先行研究の概観に加えて、ここでは異文化感受性の発達、つまり差異を知覚する構造の発達を構成主義的にとらえなおしながら「統合」に関する考察を深めていきたい。まず、物象化したカテゴリーで自己を統合した、構成主義的ではない「統合」について述べる。次に、構成主義的な「統合」の知覚構造について述べ、最後に、「統合」におけるリミナリティの経験について考える。

5.1. 物象化したカテゴリーの「統合」

最初に、構成主義的な意味での「統合」ではなく、異なる立場や社会的カテゴリーを物象化

したままで統合することの問題点について取り上げたい。「統合」のパラダイムは構成主義で、差異と多元的で流動的に関わることが自らのアイデンティティになるのであるが、素朴で物象化した理解における「統合」では、カテゴリーは所与のものとして認識されている。その場合の「統合」とは、自分のものである自己カテゴリーと、元は他人のものであり、今は自分のものに加わった他者カテゴリーを統合するという意味になる。もし初期設定が「日本人」であったなら、増設した複数のカテゴリー間を自由に渡り歩ける人という意味になる。その状態においては、あるときは「日本人」、あるときは「韓国人」や「イタリア人」になれるだけではなく、より多くのその場に合わせたカテゴリーと一体化することを自然体でやってのけ、カテゴリーを自在に出入りできるイメージが浮かび上がる。さまざまな国（カテゴリー）を渡り歩いた経験から、その場に合わせるコツをつかんでいるということでもある。DMISの「統合」には結果としてそのような振る舞いも含まれるであろうが、構成主義的な観点では「統合」のイメージはまた異なるものになるといえる。

物象化した「統合」の場合はカテゴリーを所与のものとして利用しているため、社会の多くの人々が、そして自分自身が、国籍や性別による境界形成でカテゴリー化して現実を知覚していることに自覚的ではない。そのことに無意識なまま自国への一体感を求めるならば、あたかも「完全な日本人」や「真性の韓国人」、「本物のイタリア人」がいるかのような、逆に「部分的な日本人」や「偽物の韓国人」、「不十分なイタリア人」というものがあるかのような錯覚が起こりうる。日本に戻ると日本社会で浮いてしまい韓国にいても疎外感を感じてしまうという人が、「どちらも満たさない自分は、日本人でも韓国人でもない」と感じるとき、自身を2つのカテゴリーのはざまにこぼれ落ちた孤独な存在のように認識するかもしれない。このような状態を指しているのが「閉じ込められた周辺性」(Bennett, J., 1993)であったと考えることができる。

5.2. 構成主義的な「統合」の知覚構造

山本(2022a)はDMISにおける発達後期の異文化感受性を「分かれつつ相互作用する空間への参加の仕方で、『あいだ』をつなぐ繊細さ」(p. 323)としてとらえている。そのような相互作用を構成主義的な「統合」として考えたとき、「統合」の局面で用いられている感覚とは、「プロセス中」(in process)、「移動中」(shifting)、そして「コミットメント」(commitment)によって説明されるものとしてとらえられている。山本の説明にはBennett(2012)の量子力学的観点からの構成主義の世界観が適用されている。プロセス中の感覚では理論物理学者のRovelli, C. (2017)による、いかにものらしく見えるものでも、すべては出来事であり関係性であるという説明が、コミットメントでは自己成就の予言による、現実を組織化するのは人の視点であるがゆえに視点が予言となるという説明が、それぞれ用いられている。

全体を「自」と「他」に分けたり、またひとつつながりに戻したりするなどして、視点を変えながら、任意の境界形成によってコンテキスト間の移動を行うことができるということは、「コンテキスト・シフティング」(石黒, 2016)し続けることであるといえる。そのようにし

て、現実知覚を再組織化する作業を絶えず繰り返すことを常態化させている状態を指して山本は、「プロセス中」であり、「移動中」でもあると述べている。

Bennett (2012) によると、「統合」の状態にある人のアイデンティティは、「自己」の経験を生み出すような方法で出来事を解釈し続ける、進行中のプロセスになる。したがって、「自分自身を、〈一連のアイデンティティを持った人〉ではなく〈プロセス中〉の人として経験する」(Bennett, 2017a, p. 111, 著者訳) ことが起こる。アイデンティティをプロセスしている人とは、どこかに「居ついた」人ではなく「居つかない」イメージの人でもある(岡部・山本・石黒, 2022)。

物象化した「統合」における自己像とは異なり、構成主義的な「統合」の「移動中」の感覚で行動している人にとっての自分自身とは、浮き草や根無し草のように、よりどころの無い不安定なイメージでとらえるべきものではないといえる。自己の社会的アイデンティティを形成する社会的カテゴリーは、自分または誰かの所有物として見なされてはいない。また、コンテクストに応じて自分自身を調和させ、フィット感を高めるような適応を行うことが可能であったとしても、そのような適応を繰り返す中で生じる「本当の自分問題」や「倫理性の迷い問題」(山本, 2022a) の葛藤を乗り越えて、自らある特定の立場を選択するコミットメントがなされると考えることができる。すべてが移り変わりの変化のさなかにあると考えたとき、人がある一つの何かであり続けることは不可能になる。最終的には、自分自身のコミットメントにより、ある時点において、ある立場でいることを意識的に選択することによって、自分らしさを確定させているともいえる。次の節においては、「統合」におけるプロセス中で移動中、そして自身のコミットメントを選び取るという感覚を、リミナリティに関連づけながら検討したい。

5.3. 「統合」とリミナリティ

リミナリティの概念はもともと人類学で提唱されたものであり、部族の通過儀礼において、たとえば成人の儀式をする前の者には若者コミュニティにも成人コミュニティにも属さない期間があり、その間は境界的な存在になることを指す。いずれの特徴もわずかか、あるいは、全然持たないような文化領域を通過する境界性によって、その期間の属性があいまいで不確定になることは、死や子宮の中にいること、不可視なもの等にたとえられている (Turner, 1969)。その間はコミュニティのいずれのルールも適用されないような特殊な存在となり、いったん死んでよみがえるといったイメージも持たれている。つまり、あるカテゴリーから別のカテゴリーへの移動がグラデーションのように連続的なものではなく、社会的に非連続的な空間にしばしとどまる状態のあることを指して、リミナリティと呼んでいる。

A文化でもB文化でもない(または、Aの立場でもBの立場でもない)と、カテゴリーを硬直化させた状態での「閉じ込められた周辺性」では、身動きが取れなくなってしまうていた。一方、山本(2022a)の描写するプロセス中で移動中という感覚でとらえると、リミナリティにおけるAでもBでもないこととは、巨視的に、あるいは長期的スパンで見たときの移り変わりを表すと考えることができる。区切りを設ける境界形成をどの位置に置かによっ

て、AでもBでもないことは、非連続的な状態とも、移行中の状態であり連続的な出来事であるとも認識することができる。

5.4. ターニングポイントとしてのリミナリティ

哲学者の河本（2018）は、オートポイエーシス⁵の考え方を神経細胞の発達に見られるような「要素の集合をそのつど決めて自己の範囲を決めていく」（p. 262）ものとして表している。河本によると、要素の集合は活動の中でシステムの作動を継続することに必要か否かによって決まってくる。しかしその働きは、何かをきっかけに突如別の集合の決め方を始めることがあり、それが新たな自己形成運動につながるという。河本は、人にこのような自己形成運動のあることを、自分自身の経験を再度つくりなおすような場面に当てはめて考えることができると述べており、そのような経験とは単に視点の転換や考え方の切り替えではなく、停滞に見える再組織化からの発達のリセットではないかと考えている。

その例として河本は、それまで片麻痺で半身が動かず立てなかった人が、ついに立てるようになるかという手前で、これまでの治療をダメにしてしまったのではないかと思えるほど治療段階が一時的に著しく後退する局面を挙げている。このような停滞は精神医療の現場でも見られるという。そのような停滞に見える局面は神経システムの再組織化としてとらえられており、発達はリセットされ、全体の振る舞いの仕方を組み替えながら進んでいくものとして説明されている。

つまり、ものの見方や考え方を変える程度では不十分で、現実を組織化するシステムを丸ごと再組織化しなければ乗り越えられないような局面に来ているとき、人はいったん停滞するような状態を経験するということである。これを構成主義的な「統合」に当てはめると、人が流動的で柔軟なリミナリティに至るまでも、新たな組織化までの停滞として、自己の根源に関わるようなターニングポイントとしてのリミナリティの状態があると仮定して考えることができる。

したがってここでは、「統合」の概念をより深く探索するために、以下のような仮定を置いた推論を行ってみたい。構成主義的な「統合」として説明されるような、流動的で柔軟なリミナリティを経験できるようになる前に、人は自己の根源に関わるようなレベルで「AではないがBでもない社会的に非連続的な空間にしばしとどまる状態＝リミナリティ」を経験するという仮定である。言い換えると、気づいたらそのような状態を俯瞰して見られるようになっていたというような、メタレベルでの意識の感覚が生まれるまでの間には、停滞したリミナリティの期間があり、その期間がターニングポイントとして機能することによって、「統合」のリミナリティへと至るという仮定である。AからBになるターニングポイントではなく、AでもBでもない非連続的な空間にしばしとどまることを経て、「AまたはBでなくてはならないシステム」の圏外へ飛び出すことによって、かつて物象化していたシステムを俯瞰して眺めるメタな視点がつくられる、という意味でのターニングポイントである。

異文化コミュニケーションで考えると、たとえばリエントリーショックのように「AでもBでもない」ことは、Bを知った後に起こる。リエントリーショックは留学や海外赴任など、現

地のシステムに感覚が十分になじんだ後で帰国したときに経験される。組織であれば、出向先の組織になじんだ後で、元の組織へ戻ったときが該当する。また、子どもが学校の外の世界、たとえばスポーツのクラブチームや塾、芸能活動などにおいて、新しい自分らしさを確立させてから、クラスの友人の輪に戻ろうとしたときにも、同様のことが経験されると考えられる。新しい世界を十分に知って、そこでの自分を築き上げた後で、元の世界に戻ろうとしたときに発生する共通の経験とはいかなるものであるかを、以下のような想定で考えることができる。

ある人がAという環境に慣れ親しんで生きてきたとする。そこからBという異なるシステムで人々が動き、ものごとが働く環境へと移動する。それまで自明的であり、世界を秩序立てる唯一のシステムであったAから離れ、Bの世界へ行くと、当初は戸惑うことになる。しかしBでの実践に参加することを通して、その人は次第にBでの感覚を得て、やがては内在化させていく。その後、再びAに戻ったときに、異変が起こる。

たとえば自分では普段通りにしているつもりであるにも関わらず、周囲の人と微妙にかみ合わない。あるいは、自分にBの感覚が入っていて、もはや純粋にAだけの視点で見ることができなくなっていることに気がつく。そうなると、かつてのように何も意識することのない自然体な自分ではいられなくなる。元通りというわけにはいかず、元の場所に違和感が出て、うまくフィットできないことに戸惑ってしまう。自分の意識しないところでBらしさがかもし出されていることが、Aの人たちにも感じ取られるところになるかもしれない。

Aの環境でBでもある自分を成立させることは、自分一人の思いだけでは難しい。そのためには、多面的な自己の存在を肯定する相互作用が環境の中に必要となる。しかし多くの場合、そのような環境のないことから、Aでの自分の存在は周辺化した経験につながる。Aの中で浮くからといって、単純にBへ行けば済む話でもない。何の疑問もなく自分をAだと思っていたときの居心地の良さが好きだった人にとって、それはつらい経験となるかもしれない。Aを元からさほど好きではなかったという人にとってさえ、これまでAのシステムで確立させてきた「Aの自分」を手放すことにはリスクや不安を感じるかもしれない。

この葛藤で停滞する期間を経て、葛藤を繰り返し経験する状態から、その圏外へと離脱するためのプロセスを次に見ていきたい。鍵となるのは自己への気づきと自己受容であるといえる。このことをカウンセリングのプロセスとの共通点から検討したい。

5.4. カウンセリングのプロセスにおける自己受容とリミナリティ

既存のシステムに基づいた行動を繰り返す経験の圏外へと離脱して、葛藤を乗り越える道筋には、カウンセリングを訪れる人との共通点が多い。どちらにも、自己と向き合うことと自己受容のプロセスがある。

精神科医の高橋（2007）は「心をはなれる」という自我（意識的にとらえた自分）の現象について、次のような興味深い考察をしている。高橋によると、私たちには「公式見解」としての「表の自分」があり、名前・年齢・性別・体格・容姿・職業・地位・性格・人柄など、社会的に許容される概念の集合体による自己が認識されている。社会的アイデンティティとしての「表の自分」は社会に適応して生きるための制限を受け入れ、それをきちんと守る自分なの

で、無理をしてでもがんばったり、寂しさを押し殺したり、人に認められようとしたりしている。しかし人には「表の自分」から漏れ出して生まれる「裏の自分」があり、弱音を吐いたり、ひきこもったり、ひどいことをしてしまったりもするが、そうしながら「表の自分」を支えている。つまり、「裏の自分」は社会の望む姿に合わせようとする抑圧の反動で生じているが、これは社会のシステム内で「表の自分」を生き残らせるために必要なことであると高橋は説明している。

高橋によると、通常私たちは「心をはなれない」。つまり、「表の自分」が制限している自分の通りに生きている。心の安定を崩してカウンセリングを訪れる人は、「表の自分」によって自分に強い制限をかけている。誰かに認められようとして自分を縛って懸命に働いたり、親に冷たくされて育った寂しさを感じないようにしたりしてきたけれど、その制限が限界にきて、身体や心が機能しなくなっている。そのようなとき、カウンセリングによって少しずつ自分を解放することができると「裏の自分」を認識し始めるが、「裏の自分」が「表の自分」とぶつかり合うと、制限してきたことと制限されてきたこととの間に葛藤が生まれる。「表の自分」の顔で生きて行くのはつら過ぎるし、だからといって「裏の自分」のやることは社会に適応していない。これまで維持してきた「表」＋「裏」＝「今の自分」のままではどうしようもなくなったとき、「心をはなれる」ということが起きるという。高橋によると、心をはなれた人には、自我が悩みの中で格闘し、苦しんでいるのだが、それを見ている静かな心持ちのある視点ができる。「僕って、こういう性格だからね。やっぱりそうやっちゃうわけですよ」と明るく語るようになったクライアントの日常会話の中に、自己受容とあきらめと自由があると高橋は述べている。

同様の意味合いが含まれる例に、臨床心理士の田^た寫^{じま}（2011）のいう「健全なあきらめ」も挙げられる。田寫は、悩んだ末に葛藤を乗り越えた人の状態を表す際に、「あるがまま」や「現実や自己の受容」という立派な言葉を使うと、そこに内包される哀しみや切なさのようなニュアンスが抜け落ちて葛藤を体験している本人の実感にそぐわなくなると述べ、「健全なあきらめ」という表現を提案している。あきらめとは「明らかに見極めること」に語源のあることから、葛藤を見極めるまでよく見る作業を通してこそ「健全なあきらめ」に至ると考えられている。「変わるものを変えようとする勇氣、変わらないものを受け入れる寛容さ、このふたつを取り違えない叡智」（p. 290）を鍵とした「健全なあきらめ」が実現されると、哀しみや切なさを携えたある種の安堵感や心の安らぎが生じ、ささやかではあっても現実を踏まえた希望が伴われてくるといふ。

これらを前節の例に適用して考えると、正統なAや生粋のAでなくなった「A + B = 今の自分」が、他者から、あるいは自分からも、Aの中での異質性として知覚され葛藤することに重ねることができる。「Aなる自己」や「Bなる自己」、「Aであろうとする自己」、「Aには納まりきれない自己」のせめぎ合いに葛藤する中から、Aを否定してBへと立ち去ってしまうことは、DMISの「防衛」の一種としての「反転」（善悪の軸を入れ替えて、自己カテゴリーを否定的に知覚して、他者カテゴリーとの一体感を得る）に当たる。また、Bへ行ったらところでBにもなりきれず、どこにも居場所がないと感じることは「閉じ込められた周辺性」の経

験になる。

「心をはなれる」ことが、社会を生きるために必要だと信じていた価値体系の縛りから離れることであったように、どうしようもないと思えるような葛藤の果てに、「A」か「B」しか選択肢のないシステムや、「A + B」という存在が認められないシステムの中から離脱して、それらのシステムに振り回されてきた自分を俯瞰して見渡す位置に立つことが、「統合」におけるメタ意識の発達になるといえる。そして、「でもそれが自分である」という、見極めとしての「あきらめ」と、「一周回って」の自己受容があると考えることができる。葛藤の末に、カテゴリーの枠内に納まることをやめ、葛藤する自分や葛藤を生み出すシステム自体を見通せる、少し離れた位置から眺める自分が出てくることは、心が広がる感じ、つまりは Bennett (2017) のいう自己の経験の拡張になるということができると思う。

6. おわりに

山本 (2022a) は、構成主義的な考え方で自分をとらえるようになると、カテゴリー化する境界の設定と解除を繰り返しながらも自分を見失わずにいられるだけでなく、自らの意思で自分の立ち位置を決めることができるようになると述べている。そのような人物像として山本が考えるのは、さまざまな葛藤の中から多くのことに気づき、そこから生じるさらなる葛藤とも向き合い、葛藤に終わりはないとわかった上で、だからこそ、葛藤のもたらす不確定性を常態とした世界を受け入れ、自らの覚悟で何を選択するかを決めることによって、世界を安定させようとしている人々である。

どれか一つの明確に定義された存在でないと機能できないシステムから離脱して、「A + B」や「C + D + E」や「F / G = H」など多義的な存在でいることを選択している人は数多く存在する。柔軟なりみなリティの見方で現実を組織化すると、誰もが多義的な存在であることがわかり、「完全な A」や「純粋な A」などという存在は消えてしまう。翻ってそれは、自分自身を「A である」と自らの意思で宣言しても構わないことを意味するともいえる。「決めるのは自分」という感覚であるともいえる。しかし「A や B である」ことを押し通すということではない。そのときどきのコンテキストにエンパシーを用いながら参加して、そこにふさわしい解釈をすることを試みながら、さまざまな立場での感覚や現実性を経験することができる。利用できるシステムが 1 つの人から見ると、このように型にはまりきらないことを常態とする人々は、落ち着かない気持ちを抱かせる存在になる可能性がある。

日本国籍を持ちアメリカに住むテニスプレイヤーの大坂なおみ選手が 2018 年全米オープンで初めて優勝したときは、日本のインタビュアーが「好きな日本の食べ物は？」や「感想を日本語で」など、盛んに「日本人らしさ」に関連づけた発言を引き出そうとする現象が見られた。インターネット上には「見た目は日本人らしいとは言えないけれど仕草や表情が日本人っぽい」や「日本語が流ちょうではないけれど日本人ってことでいいのかな？」など、大坂選手が何人かで戸惑う声があった。大坂選手は Black Lives Matter 運動の支持を表明し、2020 年の全米オープンの試合で、警察の人種差別的な暴力による黒人犠牲者 7 名の名前を書いたマスクを

7回の試合でそれぞれ着用した。決勝戦の2ヶ月ほど前になる2020年7月12日のEsquire誌ウェブ版で、大坂選手はこの問題に対する自身の考えを述べている。その冒頭は次のようなものであった。

私の名前は大坂なおみです。物心がついたころから、人は私を「何者か」と判断するのに困っていました。実際の私は、1つの説明で当てはまる存在ではありませんが、人はすぐに私をラベル付けしがります。

日本人？ アメリカ人？ ハイチ人？ 黒人？ アジア人？ 言ってみれば、私はこれらすべてです。私は日本の大阪で、ハイチ人の父と日本人の母の間に生まれました。私は娘であり、妹であり、誰かの友だちであり、誰かのガールフレンドなのです。アジア人であり黒人であり、女性なのです。たまたまテニスが得意だったということを除けば、他の人と変わらぬ22歳です。私は自分自身をただ、「私＝大坂なおみ」として受けとめています（エスクァイア日本版、訳 Keiko Tanaka）。

大坂選手からのメッセージにはまだ先があるが、紹介した一部の範囲においても、複数のカテゴリーを同時にプロセスし、流動的に移動し続ける人の葛藤と、その上で宣言する自己へのコミットメントの姿を見て取ることができる。

本研究ではDMISの「統合」を検討する中から、新たにリミニナリティについての考察と仮定的な推論を通して、差異にまつわる葛藤の中で成長する個人を「統合」の人物像に加えた。グローバルに移動する人々や、家庭や職場でさまざまな役割を同時に引き受けながら生きる人々、社会で有標化する自身のアイデンティティを不都合にしない生き方を選択したい人々、学校と学校外の居場所を両立させたい子どもたちなどにとって、このような「統合」のあり方が参考になるように、今後も理論的考察を加え、教育での活用方法についても考えていきたい。

引用文献

- Adler, P. (1977). Beyond cultural identity: Reflections on multiculturalism. In Brislin, R. W. (Ed.), *Culture Learning* (pp. 24-41). East-West Center Press. Retrieved from: <https://www.mediate.com/beyond-cultural-identity-reflections-on-multiculturalism/>
- Bennett, J. M. (1993). Cultural marginality: Identity issues in intercultural training. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience* (2nd ed., pp. 109-135). Intercultural Press.
- Bennett, M. J. (1986). A developmental approach to training for intercultural sensitivity. *International Journal of Intercultural Relations*, 10(2), 179-196.
- Bennett, M. J. (1993). Towards ethnorelativism: A developmental model of intercultural sensitivity. In R. M. Paige (Ed.), *Education for the intercultural experience* (pp. 21-71). Intercultural Press.

- Bennett, M. J. (2004). Becoming intercultural competent. In Wurzel, J.S. (2nd Ed.), *Toward multiculturalism: A reader in multicultural education* (pp. 62-77). Intercultural Resource Corporation.
- Bennett, M. J. (2012). Paradigmatic assumptions and a developmental approach to intercultural learning. In M. Vande Berg, R. M. Paige, & K. H. Lou (Eds.), *Student learning abroad: What our students are learning, what they're not, and what we can do about it* (pp. 90-114). Stylus.
- Bennett, M. J. (2017). Developmental model of intercultural sensitivity. In Y. Y. Kim (Ed.), *International encyclopedia of intercultural communication* (pp. 643-651). Wiley.
- Berger, L. P. & Luckmann, T. (1966). *The social construction of reality*. Doubleday Anchor Books. (ピーター・バーガー & トーマス・ルックマン (2003) 山口節郎 (訳) 『現実の社会的構成：知識社会学論考』新曜社)
- Brewer, M. B., & Miller, N. (1984). Beyond the contact hypothesis: Theoretical perspectives on desegregation. In N. Miller & M. B. Brewer (Eds.), *Groups in contact: The psychology of desegregation* (pp. 281-302). Academic Press.
- Glaserfeld, E. von (1995). *Radical Constructivism: A Way of Knowing and Learning*. Falmer Press. (エルンスト・フォン・グレーザーズフェルド (2010) 西垣 通 (監修) 橋本 渉 (訳) 『ラディカル構成主義』NTT 出版)
- Hammer, M. R., (2012). The Intercultural Development Inventory: A new frontier in assessment and development of intercultural competence. In M. Vande Berg, R. M. Paige, & K. H. Lou (Eds.), *Student learning abroad: What our students are learning, what they're not, and what we can do about it* (pp. 115-136). Stylus.
- Hammer, M. R., Bennett, M. J., & Wiseman, R. (2003). Measuring intercultural sensitivity: The Intercultural Development Inventory. *International Journal of Intercultural Relations*, 27(4), 421-443.
- Rovelli, C. (2017). *L'ordine del tempo*. Adelphi Edizioni. (カルロ・ロベッリ (2019) 富永 星 (訳) 『時間は存在しない』NHK 出版)
- Spencer Brown, G. (1969). *Laws of form*. Allen & Unwin. (G・スペンサー＝ブラウン (1987) 山口昌哉 (監修) 大澤真幸・宮台真司 (訳) 『形式の法則』朝日出版社)
- Turner, U. W. (1969). *The ritual process: Structure and anti-structure*. (ヴィクター・W. ターナー (2020) 富倉光雄 (訳) 『儀礼の過程』筑摩書房)
- Yamamoto, S. (1996). A theoretical grounding of the intercultural sensitivity model. *Contexture: 埼玉工業大学教養紀要*, 14, 67-88.
- Zeiser, B. (2014). Young people have better views on racism. *The American Spectator*. Retrieved from <https://spectator.org/young-people-have-better-views-on-racism/>
- 石黒武人 (2016). 現象の多面的理解を支援する「コンテキスト間の移動」に関する一試論：グローバル市民の醸成に向けて 順天堂グローバル教養論集 1：32-4
- 岡部大祐・山本志都・石黒武人 (2022). 「ポジショニング：1つのカテゴリーに『居着く』」の

- をやめる！」山本志都・石黒武人・Milton Bennett・岡部大祐,『異文化コミュニケーション・トレーニング:「異」と共に成長する』三修社.
- 河本英夫 (2018).『哲学の練習問題』講談社.
- 高橋和巳 (2007).『心をはなれて、人はよみがえる:カウンセリングの深淵』筑摩書房.
- 田嶋誠一 (2011).『心の営みとしての病むこと:イメージの心理療法』岩波書店.
- 山下美樹 (2018).ゼミプロジェクトヒューマンライブラリー実践と異文化感受性発展の考察
麗澤大学学際ジャーナル 26, 73-82.
- 山本志都 (2014). 文化的差異の経験の認知:異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述 多文化関係学 11, 67-86.
- 山本志都 (2016). 文化的差異の認知の構造と異文化の境界水準との関係をめぐる考察:異文化感受性発達モデルとの比較と検証から 異文化コミュニケーション 19, 93-111.
- 山本志都 (2022a).「異文化コミュニケーションと成長:異対面から先へ、そして相対主義から先へと歩いていこう!」山本志都・石黒武人・Milton Bennett・岡部大祐,『異文化コミュニケーション・トレーニング:「異」と共に成長する』三修社
- 山本志都 (2022b). 異文化感受性発達尺度の開発:日本的観点の導入と理論的整合性の向上, 多文化関係学 19, 39-59.
- 山本志都 (2022c). 異文化コミュニケーション教育におけるカテゴリーとカテゴリー化に関わる構成主義の活用:メタファー・DMIS・「異」を中心として, 東海大学紀要文学部 112, 31-59.

註

- 1 本研究は科研費の課題番号22K00675による助成を受けている。
- 2 発達には6つの stage によって描写される。英語の stage の一般的な翻訳は「段階」であるが、山本 (2022a; 2022c) は「段階」に加えて「局面」の訳も採用している。山本は DMIS を葛藤と共に成長するプロセスを描写したモデルと述べており、変化の最中であることを意識する上では、「局面」とする方がより動態的なとらえ方ができると考えている。本論文においても文脈に応じ、段階と局面の両方を使用する。
- 3 Yamamoto が DMIS の理論的基盤を明確にすることを重視した背景には、モデルが描き出そうとしている知覚構造の発達が本質主義的にとらえられがちであったことへの懸念があった。現象把握のための理論として理解した上で活用されずに、各段階での行動描写などが「『防衛』の人はこういう行動を取る」と本質主義的な理解によって独り歩きしがちの状況があった。
- 4 エンパシーの日本語は共感に当たるが、山本 (2022a) は共感という概念の幅広さに触れながら、異文化間能力やコミュニケーション・スキルとしてトレーニングする認知的能力としての共感に言及するときをエンパシーとして、英語のカタカナ表記で表している。相手が組織化する世界を自分でも同じように構成しながら追体験することとして説明されている。

- 5 閉鎖系のシステムにおける自己産出、自己組織化を意味するオートポイエーシスは、ウンベルト・マトゥラーナ（Humberto Maturana）とフランシスコ・ヴァレラ（Francisco Varela）の二人の神経生理学者によって提起された考え方で、さまざまな分野に多大な影響を与えている。

A Study of “Integration” in the Developmental Model of Intercultural Sensitivity

Shizu Yamamoto

Abstract

This study will examine the final stage of Developmental Model of Intercultural Sensitivity (DMIS), “Integration,” which has not been discussed much in the past. Specifically, this study will focus on examining how Integration is described when constructivism is applied as a meta-theory for DMIS. The concept of liminality, which describes boundary identities, will also be examined to further discuss Integration.